

異 伝

鬘童子（マールンキヤプッタⅡ摩羅鳩摩羅、摩羅迦子Ⅱマールンクヤ子、マールンキヤ尊者の子）が登場する箭喻経は仏教（バウツダ、仏陀の教え）の真髄の一端を露呈する高名な仏典だが、

「異伝が発見されたんだって？」

「異伝っていうか、後日譚みたいなものなんだ」

「偽典じゃないの？ 何処で誰が見つけたんだよ」

「真神郡龍吞村にある龍吞神社さ。」

禰宜ねぎが校倉あぜくらの整理中に見つけたらしい

「地元ここで？ しかも、じんじゃー？ どう考えても贋作だろう」

兎も角、漢文で綴られた原典の写しを読んでみる・・・

「これ、もしマールキヤプッタが生きていたら名誉棄損で訴えそうな内容だな」

彼は笑った。

「人の役立つなら善いことじゃないか」

鬘まん童子は箭やの喩えを以って仏陀に諭された後も、ただちに

心の安らぎを得たわけではなかった。

その夜もまた悶々と過ごし、早朝、いつもどおり托鉢のために祇樹給孤独園精舎（祇園精舎）を出た。

聳える城壁に囲まれた都市、舎衛城（シユラーヴァステイ）の壮麗に聳える門を通り、商館や大邸宅や戦車競技場が並ぶ、繁栄偉いなる市街を歩く。

裏通りに入り、貧民の多い地域に出た。職人の徒弟や富裕商人の使用人や奴隷階級の者たちが住む地域だ。

不良少年たちが屯していた。

本当に貧しい家の子らもいれば、普通の庶民の家に生まれながら、敢えて道徳に背を向けて奔放に生きたいがために最下層階級に交わっている子らもいる。

一人の少女の姿が目にとまった。

年頃は十三、十四歳くらいか。眼差しが強く、眼がくつきり淫靡な化粧で縁取られ、輝く睛が大きく美しい。黒い真珠のような肌は萌える芽のようになめらかで切ない繊細さ。真っ黒で波打つ髪はつやややかだった。彼は胸決るようなものが奔った。

それは何か根源的な強さと豊饒さと魅惑で、彼を惹きつけた。説明の要らない、原初的な生命の、鮮やかに、碧く燦めく海だ。心が火矢で射抜かれたかのような思い。彼は信じた、それは天啓のように疑う余地もなく、龍神が目の前で告げたかのように絶対で動かし難かった。「この人には他にない美しい魂が宿っているに違いない：」

しかし出家者が唐突に話しかけても、世俗の快樂けらくを追及する者らに嘲られてしまうのがおちである。

彼は眼を伏せて行き過ぎた。

だが翌日、鉢を持ってその同じ路を歩いたのである。不良たちは昨日と同様に石造の建物の日陰にしゃがんでいた。草を噛んでいる。恐らく薬草のようなものだろう。例えばソーマ(蘇摩) バラモンの祭祀などで使われた興奮飲料で高揚感や幻覚作用をもたらす)のような。

少女と双眸が合った。鬘童子の何かが崩れ壊された。血が逆流し、熱い槍が体を貫く。悪鬼羅刹のような、激しいものが込み上げる。堪らない。獣だ。逃げるように半ば駆足で、ようやく祇園精舎まで帰り着いたが、激しい動悸で息が切れた。

振り払うように坐して瞑想を始めるも、心が統一しない。

『世界は常住か、無常か。宇宙は無限か、有限か：』

そう何度も呟くも、かつて心を悩ましたこの抽象的疑問が一切心を惹かない。

昨日はついに詰問して仏陀に回答を強要した難問が、いまはまったく心にリアルではない。別の苦しみが心臓を苦しめ、躬悶きんもんえさせていた。

ああ、師はあの時こう言われた。

「その答が解れば、汝は苦しみから解脱できるか、老病死を解脱できるか。」

はつきり言おう。さようなものは苦しみからの解脱に、涅

槃寂静に導かない、と」

それから数日後、托鉢中に少女が一人で歩いているのを見かけると、遂に声をかけて呼び止めてしまった。

「あなたの眸には叡智がある。

あなたには人に優れた精神が宿っています」

「何なの、あんた？ 汚らしいわね。話しかけないでよ。

馬鹿じゃない？

あなたたちみたいになさ、頭のおかしい連中なんか、相手にしてらんねーよ。

わかるでしょ？」

うなだれてどこの家に寄らず、布施も貰わないまま精舎に帰り、瞑想を始めた。しかし思いはとりとめもなく、繰り返すばかり。

日が暮れて夜になっても考え続けた。

翌朝、精舎を出て舎衛城へ向かう路傍で、小さな白い花を見つけた。しばらくぼんやりと見る。思い立ったように摘むと歩みを速めた。

不良らは屯していた。

少女は上機嫌で笑いながら話している。真っ白い歯が生きて、つや光る黒い肌に美しい。

鬘童子は黙って彼らの前に立つと鉢を前に出した。

男の子が言った。

「ざけんじゃねーよ」

「布施をすれば、あなたの功德になります。功德を積みれば来

世でああなたの救いになります」

「要するに、おまえの言ってることは、乞食であるおまえが俺たちから食べ物を買って差し上げましょう、って言ってるんだぜ。」

頭おかしくねーか？」

「分かりました。私たちは恨むことはありません。」

布施をしてくれないからといってそれを悪く思うことはありません」

「そうかい。じゃ、とつとと失せてくれ」

「そうしましょう。」

それから、お嬢さん、いつぞやは声をかけてすみませんでした。

お詫びに私の清真明誠を示す贈り物をさせてください」

そう言って少女に花を差し出した。

最初、少女は鼻に皺を寄せて怪訝な、厭わしそうな表情をしたが、瞬時に微笑を作り、鬘童子に蠱惑的な眼差しを送る。

「素敵。ありがとう」

童子は予想外の反応に顔が熱くなった。どう応えてよいかも判らず、どもりながら「い、いえ」と言うのがやっとで立ち去った。

その夜、苦しみと幸福が交互に襲って彼を眠らせなかった。

翌朝も托鉢に出る。

裏路地で少女を見つけた。

彼女は朝帰りのようであった。数人の若い男たちにちやほ

やされて、女王のように振舞っている。鬘童子は胸を抉られた。

自分はあるの中に入ることができない。たとえ還俗し、遊び人の中に入っても、魚が草原で生きようとするようなもの、性的に不可能である。

あんな風になれない。心臓を抉るどす黒い憤りの感情。嫉妬だった。

邪悪な暗黒の感情。生まれて初めて感じる感情であった。その苦しみに耐え切れず、壁に寄りかかりながら、斬られ射られ満身創痍の兵卒のように精舎に帰った。

自分はある少女のような人にとっては異界の人。

それでも翌朝には疲れたように街に赴く。少女が一人で歩いているのをまた見つけた。

その日、食べ物ばかりでなく、貨幣を鉢に入れてくれた人がいて、鬘童子は思わず少女を呼びとめてお金を渡した。少しでも遊び慣れた男たちに負けまいとした気持ちからだった。絶望しながらも藁にも縋る思い。

「ありがとー」

少女は満面の笑みで言った。

こうして彼は物品や貨幣、または少しでも良い食べ物を貰うと少女に渡すようになり、そのお礼に微笑を与えてもらうようになった。

その微笑みが偽りなのはわかっている。辛うじて物品で繋がっているだけ。彼女に何も施さない男衆にも、もっと簡単

に与えられている。

そんな虚しさを抱きながらも憑かれ、日々疲弊し、朦朧として夢遊者のように、青ざめた浮遊霊のように通う。無駄だと知りながらも止められない。ドラッグのように憑かれて止められない。

「最近、ずいぶん痩せやつれたな」

摩訶迦葉（マハーカッサパ）は鋭い眼で見抜き、言う。

「いや、何でもありません」

鬘童子はまったく以って亡霊のようになっていた。

なぜならば心苦しむ新たな理由が生じていたからだ。

彼はいつしか少女の家を知るようになっていた。そして毎日のように男がそこに通うのに気が附いた。男は三〇歳ぐらいに見えるが、後に四〇歳であることが分かった。遊蕩に明け暮れた風情で、いかにも色好み、女をたらし込むのに長けた感じの人物である。

鬘童子は心怪しみ、彼の後を追って或る館に着いた。子供の声がし、女性の声も。男は妻子持ちであった。

暗澹とした予感が心中を苛んだが、まさかあんな年の違う男を：：そう思おうとした。狂おしい不安。

街外れを托鉢で歩いていた或る朝のことである。

瀟洒な貸家からあの少女が出て来た。ドツキリとするとともに、息が詰まる感情が。なぜ？ 彼女の家でもないし、あの男の家でもないし。不安混じりの混乱に襲われる。

しかし一瞬ですべてを覚り、暗雲に血管が塞がれて全身の

力が抜けてしまった。見上げると、予感違わず、二階の窓にあの男の姿が。そこは彼の別宅だったのである。

童子は牽き裂かれた。

刹那、男と少女とを惨殺して自分も死のうと、破れかぶれで身勝手な衝動が足の先から頭の天辺までを貫き噴き上がる。

我を忘れ、追い駆けて腕をつかんだ。

「あなたは、あなたという人は、いったい、何をしてたんだ。

あ、あんな男とっ」

驚いて振り向くが、

「何だよ、あんたかよ。何喚いてんの？　頭おかしいんじゃないか？」

「だって、そうじゃないかつ、あなたは今あそこから出て来ただろっ。見たぞっ」

「かんけーねーだろ」

「関係ない？　関係ないだと！　あなたのために、こんなにも心配して、身も崩れ壊れそうなのに！」

「知らねーよ」

体が震え、激しい衝動が天地を裂いて身を貫き破った。「きさま、きさまっ」

しかし彼は壮絶必死の努力でその心を押し殺し、逃げるようにその場から離れた。離れなければ大変なことを仕出かしてしまう、それが理性の最後の抵抗だった。息も絶え絶え、漸く精舎に辿り着き、糞掃衣に包まって震えを抑えながら魂魄の限りを込めて自制御した。

「ああ、胸が苦しくて堪えられない。息が詰まり、全身が重い。心臓が重圧で苦しくて呼吸ができない。

なぜ、なぜこのように苦しいのか。どうってことないことではないか。私の理性が事柄を分析し、理に照らし、何でもないぞと答えているのに、ましてや世によく聞くことであるというのに、まったく自分の心が制御できない。この苦しきは、いったい、何なのか。

ああ、何でもない筈なのに、凄まじい力が炎の怒涛や烈しい濁流の氾濫のごとく私を奪い破壊し攪い碎き散り、情念が噴火の如くどす黒く意識を占拠する。これは、いったい、何なのか。

怨み、嫉妬、憤り、憎悪、いや、そのような名称など形骸に過ぎない。この生々しく噴き上がって、身を裂く情念にとっては。

どうにもならないっ、どうにもならないっ！

ああ、どんな言葉も説得も、一向役に立たない。抵抗できない。まるで怒涛だ。ああ、苦しい、胸が裂けそうだ。脳髓が潰されそうだ。ああ、ああ、急がないと、ああっ。

早く、早く忘れるんだ、忘れるんだっ。忘れるしかない。忘れてしまえっ。ああ。

師がかつて言われたではないか。すべては空ではないか。空なのだ。煩い苦しむに当たらないっ。空だ、空だっ、空なんだっ」

しかしそのように想うことなど不可能なのである。

ついに苦痛に耐え兼ねて、仏陀の膝下に縋り、悲痛に叫んだ。

「師よ、助けてください。心が苦しくてたまりません。どうか、お救いください」

仏陀は静かに鬘童子を見下ろした。

「どうしたのだ、マールンキヤの子よ。」

世界が常住か無常か、宇宙が有限か無限かを未だに煩悩んでいるのか」

「違います、師よ。」

そのような虚しい事柄ではございません」

「では、訳を話さない」

鬘童子はいざ話そうとすると、偉大なる仏陀の前では所詮嫉妬でしかない己の行為に恥辱の気持ちが生じた。

師はその様子を見て言う、その言葉は静かで、鬘童子の心の呪縛を優しく解き始める。

「若者よ、ならばここに今朝布施を受けた白絹がある。これに木炭で書くがよい。」

そうです。最初からすべてを記しなさい。私はここで見守っています」

童子はしばらく書けなかった。絹に書くことが恐れ多かったからではない。彼にはそのような想いが生ずる余裕はなかった。混乱して何があったか判らなかったからだ。

やがて書き始めると今度は止めることもできぬほど狂おしく書き続け、朝になった。仏陀は静かに見守っている。

「師よ。できました」

疲弊し、汗だくになって鬘童子は絹を渡した。

読み終えて仏陀はしばらく黙っていたが、やがて言う、苦しみと恥ずかしさと、戒律を破った怖れによって、小さく丸くなって胸を押さえている鬘童子へ。

「聞きなさい、若者よ。」

どのような教説もそれを癒せない。

なぜなら、その苦しみを心に生ぜしめるものは、理性によって構成されたものではないからだ。

それはただ、力だ。

そしてまた、その苦しみから逃れたいと欲する汝の気持も、同じく力だ。けして正統なる理路の、整然たる根拠からではない」

仏陀は瞑目し、言葉を区切った。

そうか、力か：…鬘童子は目を伏して頭を下げ、手を突いて土を握りしめた。再び仏陀は語り始める。

「若者よ、静かに省みなさい。」

汝の苦しみが、汝の行為が正しいにも拘らず認められないから生じているわけではないことも、汝ならば気が附いているであろう。

それは恋情であり、由来は種の存続にあり、生命という大河を源としている。そのような宇宙の巨大な力にどうして人間が勝てようか。

数億、数十億の歴史を経て積み上げられ、今日に至ったも

のが、どうして容易く解消できようか。人間の理性など大海原の上の木の葉のようなものだ」

鬘童子ははつとした。生命の力、躍動、そうか、だから彼女はあんなにも魅力的に見えたのだ。

「すなわち、若者よ、どのような論理も解決しない。力は非情で無明だ。

解決や答という考え方は論理的なものだ。そのような脆弱なものを用を為さない。論理とは矛盾のためにあり、矛盾に苦しむ人間を執着させるためにある。例えば子どもが遊戯に負けて尚更熱中するように、賭博師が賭けに負けてよりいつそうとり憑かれるように。

論理的思考は生命の原理を源としている。だから突き詰めれば答がない。いや、こう考えることさえ論理的で、生命の海の波に乗せられているのだ。

汝は考えたか。なぜ論理が正しいか、いや、論理とは何かを。汝は考えたか。

仏陀はその問いに無記（記別しない）で答える。すなわち答えない。

答などないからである。ありやうがない。

しかし人は努力せねばならない。正しいことを為すことによって、やがて心は執著を厭離するのだ。

正しい行為を積み、若者よ。

事実の積み重ねによって生じた苦しみは事実の積み重ねによって止む。

時を重ねて積まれた苦しみはそれに相応しい時を要して癒える。その時が来るまでは癒えぬ事実を覚悟し、努力しなさい」

童子は顔を上げた。頬には滂沱の涙。弱々しく尋ねる。

「どのような努力をしたらよいでしょうか」

仏陀は暫し瞑黙し、厳かに、

「日頃の教えのとおりにしなさい」

童子は頭を下げ、床に擦る。

「空だと想おうとしてもできませんでした。」

無常だと想おうとしてできませんでした」

仏陀は瞑黙したまま、

「私はそのように教えたであろうか。」

空を想うことなど不可能である。

見事な牡牛を生贄に捧げて神に祈れば願いが叶うと思うのと同じような、虚しいことである。

空（シューニヤ）は零（シューニヤ）であり、ないことを言う。鉢に入っていた乳粥がなくなったとき、乳粥が零になったと言う。それがなくなったときに人間は初めてそれを認識する。

空自体を想うことなど不可能だ。

世俗の人が考えるように考えなさい。明白ではないか。

私が、

『自我に執著する識見を打破し、世を空として観ぜよ』

と言うときは、厭離せよと諭するのであって、空を覚れと命

じているのではない。

空は執著を厭離し、岸へ渉るための筏であって、岸に上があれば牽いて歩く物ではない」

「どのようなすればよいのでしょうか」

「たとえば、このように想いなさい。

自分が正義であつても冤罪に辱められ、侮りと蔑みに身を晒され、嘲られ、罵られ、望みを打ち碎かれる、と。その異逆を睿らかにし、自らを捨て、自らを喪いなさい。人のために尽くすために」

仏陀は再び沈黙した。

自分で考えよという意味だ。すべての話は終わったのである。

鬘童子は自分の居場所に戻ると結跏趺坐し、教えられたとおりに念じ、瞑想した。

無論心が言うことを聞く筈がない。

師の言ったとおりに想いを做すことはできても空疎で何のリアリティもない想いであつた。

ただ、時を積み、という言葉が支えであつた。頼りなく儚いが、それに懸命に縋つた。今を耐え、必死で縋つた。

数日は恐ろしく長かった。托鉢には行かなかったが、仏陀が布施を分けてくれた。唐突に悪鬼のような狂おしい憎悪に襲われた深夜、街に行つて………という衝動が襲つたときもあつた。門衛が市門を閉じているが門衛を殺して鍵を奪い………そんな妄想が脳髓を占領した。時に自分があの少女に

受け入れられなかった事実が美しい彫像になって蒼穹に立つ幻影も見た。ああ、自分は癒えつつあるなどと思う日も束の間、愛執の生々しい傷口から血が迸り出て心臓を乱す。衰弱が酷く、まるで歩く死骸のようであった。

痩せ衰えて肋骨や背骨がはつきり浮き出、爪は伸びず、肌は乾いてつやを失った。或る日は野の草花の美しさに気附いたりもする。そんなときはふっと更生しつつある自分を感じたりもする。しかしまた雨の日には憂悶に囚われ、そして静夜にも再び修羅となり、残忍な悪夢が脳髓を跳梁跋扈し、邪魔魔道の百花繚乱……。

しかしそれでも。

次第に時が問題を解決し始め、心に寂莫を想う余裕の生じた日、彼は満を持して人間を構成するものが無常である瞑想に取り組んだ。老いてたるみ、朽ちて腐り、やがて乾いて白骨となり……一瞬も止まらず、実体性のない人間の存在……微かなリアリティを感じる。

それが突破口だった。

やがて鬘童子は激しい濁流の波涛を越え、彼岸にたどり着くのである。

到彼岸にあたっては、速やかに筏が乗り捨てられたの言うまでもない。

完